

〈特集①:自律学習の今 —台湾の教育現場から—〉

交換留学生は日本で何を学んでいるのか

—ジャーナル・アプローチの手法による自律学習の考察—

石川清彦

1. 背景と目的

昨今、高等教育機関における国際交流は盛んになり、単位の互換制度など、教育内容を共有する協定も増えている。学習者は、留学先機関で受講する科目を選択し学習するだけでなく、生活そのものが、言語や文化の学習に直結している。そこでは、何をどのように学ぶか、あるいは学ばないかについて、学習者自身が気づき、考え、取捨選択するという自律学習が行われているといえる。

筆者は、留学先での学習を自律学習と捉え、ジャーナル・アプローチの手法を用いて、学習状況を具体的に把握することに努めた。また、ジャーナル・アプローチの手法は、自律学習の環境作りに通じることから、「ジャーナルを書く行為」自体を自律学習の一環であると考え、作文能力の向上を目的とした自学ノートとしての役割も加味して実施した。

本稿では、その実施過程、および記述、特に学習者の内省や自己評価、自己管理に関する記述について考察し、派遣留学生に対する自律学習の支援を考える。

1-1. 自律学習とジャーナル・アプローチ

自律学習(autonomous learning)とは、学習者自身が自己の学習に主体的にかかわり、学習を孤立化せず、教授者や教材や教育機関などといったリソースを利用して行う学習である。青木(2001)では「学習者が自分のニーズや希望に役立つように、自分の学習をコントロールするための能力」を「学習者オートノミー」とし、何を学習するか、さらには学習するかしないかの決定権も学習者が持つものとしている。また、自律学習における教師の役割として、その実践を可能にする環境作り、具体的には「学習者が情報にアクセスできる環境を作ること」「相談相手、コンサルタントになる」「人のネットワーク作り」「学習のコツを身に付ける手伝い」「内省の力を育てる手伝い」「気持ちに対処する方法を見つけるのを助ける」「学習者を信じる」などがあげられている。

今回、自律学習の確認のために用いた手法はジャーナル・アプローチである。ジャーナル・アプローチについて、倉地(2006)は「学習援助者が、ジャーナルという私的な世界を学習者と共有する以上、学習者との間にラポール(信頼関係)を確立させなければならない。」とし、そのためには「学習者が安心して自己開示できるような空間(ジャーナル世界)」が成立することが必要だとしている。この「ジャーナル世界」は、上述した自律学習の実践を可能にする環境の一つであると言える。すなわち、安心して自己開示できてこそ、ジャーナルを書く行為が、自律学習を意識化する機会、内省の機会になると考えられる。また、ジャーナル・アプローチにおける「学習援助者の役割」は、自律学習における「教師の役割」と多くの部分で共通している。したがって、ジャーナル・アプローチという手法で、個々の学習者の「自律学習」を把握しようとすることは、自律学習の環境作りを促進することにもつながると考えられる。

1-2. 自学ノートとジャーナル・アプローチ

自学ノートもジャーナル・アプローチも、個々の学習者の記述に対し、教師(あるいは学習援助者)がフィードバックを行う活動である。それは「書く」という行為を通じた個別のコミュニケーションであり、双方の活動にとって、この個別のフィードバックこそが、活動継続の重要な要素になっている。

しかし、自学ノートとジャーナル・アプローチは、目的および手法に違いがある。ジャーナル・アプローチは、異文化理解・異文化学習の領域で成果をあげてきた方法である。基本的に自由記述であり、学習者の記述に対する添削や評価を行わないことが原則とされている。

一方、自学ノートの目的の大部分を占めるのは、家庭での学習習慣を身につけることである。一般的な宿題と違い、学習者が学習内容を自分で選択することが基本であるが、選択肢(メニュー、テーマ)は教師が設定する場合が多い。「自学ノートを書く」という行為は、学習活動の一環であり、フィードバックでは、学習者の記述に対する添削や評価を行う。

今回の考察においては、ジャーナル・アプローチの手法を用いながら、学習者の動機付けや、記述の促進のために、自学ノートの要素を取り入れている。具体的には、質問の形でテーマを与えたり、明らかな誤記に関しては添削を行った。

2. 実施方法

留学中の学生とは、ノートを媒介にすることができないため、Eメールで添付書類を交換する方法を採った。2008年10月より日本の大学に短期交換留学生として派遣された5名の学生と、更に2009年4月より派遣された4名、2009年9月より派遣された4名とEメールの交換を行い、現在(2009年10月現在)留学中の8名との間で継続している。

学生に示した目的は以下の通りである。

1. 交換留学生の派遣先での状況を把握する。
2. 異文化理解に向けた側面支援。

更に、付随的に以下の効果を期待していることも伝えてある。

1. 作文能力の向上。
2. 派遣先での学習支援。

具体的には、以下の指示を行った。

1. Eメールに添付したワープロソフトの文章を学生が送付し、コメントを付したものを返送する。必要な場合は添削を行う。
2. 毎月10日、20日、30日を締め切りの目安とする。
3. 形式は、日記形式で日常生活および学校生活についての記入を基本とするが、学生からの質問、教師からの質問に対する回答も含む。

実際に行われたEメール交換の状況は以下のとおりである。

学生	派遣時期	派遣先機関所在地	往復メール数 (2009年10月20日現在)
A	08年9月～09年1月	兵庫県	11通
B	08年9月～09年2月	徳島県	13通
C	08年9月～09年2月	徳島県	12通
D	08年9月～09年8月	広島県	30通
E	08年9月～09年8月	広島県	30通
F	09年4月～10年2月(予定)	茨城県	11通
G	09年4月～10年2月(予定)	広島県	10通
H	09年4月～10年2月(予定)	広島県	10通

I	09年4月～10年2月(予定)	広島県	11通
J	09年9月～10年2月(予定)	兵庫県	1通
K	09年9月～10年8月(予定)	千葉県	2通
L	09年9月～10年8月(予定)	広島県	1通
M	09年9月～10年8月(予定)	広島県	2通

3. 学生の記述に見られる学習状況

学生の記述からの引用については、理解が難しかったり、誤解を招く可能性がない限り添削前の原稿を引用した。なお、個人の特定につながる記述等は削除した。

3-1. 授業を通じた学習

まず、学生が派遣先機関で履修した科目についての記述を引用する。ただし当校からの短期留学には二つの方法があり、留学生交換協定のある機関との交換留学生(特別聴講生)は、派遣先に到着してから履修科目の登録までの間に選択期間がある。一方、科目履修生として留学した学生は、入学許可の申請以前に履修科目を決めなければならず、基本的に変更はできない。

・授業が終わってから、先生に要望を言いました。「先生、すみませんが、私は台湾から来た留学生ですが、さき先生がほとんど関西弁でしゃべったから、私は聞き取れませんでした。今後は標準語でしゃべっていただけませんか。」と言いました。そして、先生が「慣れれば大丈夫！どこでもいろいろな方言があると思うね。台湾もそうやろう？(関西弁)この辺の人はほとんど関西弁でしゃべってるから、慣れてください。」と答えました。しかたがありません。(A10/10)

たぶん初対面であろう教師に対する、学生Aの行動と発言は、ある意味で勇気のある行為であり、一方で、傲慢と受け取られかねない行為でもある。事後報告なので危険回避についての助言はできなかったが、後日の記述を見ると、ゼミにも参加するなど良い関係が作れたようである。

・実は、交換留学生はとれないのですが、先生にオッケーもらったので、入れることにな

りました。その先生は関西出身で、関西のなまりが強いです。最初はよく聞き取れませんでした。二ヶ月経ってだんだん慣れてきました。(A11/25)

学生Fは、科目履修生が授業を変更できないことに対して、不安を感じ、録音やノートを取るなど、自分の学習を計画することで克服しようという姿勢が見られる。

・授業が来週の月曜日から始まります。今週は授業の説明です。しかし、説明の内容には知らない単語が多くて、ちょっとわかりませんでした。しかし、授業の先生から録音の許可をもらえました。本当によかったと思います。(F4/10)

・台湾で選んだ授業は変更できません。たとえ、授業で先生の話すスピードが早くて、全然わからなくても、ほかの授業に変更できません。(F4/20)

・人文地理学の授業では聞き取りがとても難しいです。授業中はずっとノートを書きます。先生の話が大体わからないので、期末テストにちょっと不安になります。(F4/30)

すべての学生に共通のことであるが、選択した授業について不安を表明するものが多い。そして、それに対する自分への鼓舞、努力不足への反省、勉強方法の再考等の記述が見られる。

・日本人の学生たちと一緒に、お互いに質問をして、意見を聞いて、「異文化理解と交流」の授業も受けている。授業は少ないが、二週間に一回の作文提出と、週に一回の感想文提出はすごく大変だ。休みの日、どこにも行かなかった、ずっと予習したり復習したりした。(E10/10)

・12科目をとったことに対してもちょっと後悔しています。どれぐらい忙しいかというと、まず、スピーチみたいな発表は週に1,2回あるのが普通で、時々週に3回以上もあります。(A11/9)

・友達との会話だったら、意味が通じればいいですが、正式の発表の最後に、みんなの前で質問に答えるときには、やはり適切な表現が必要なのでしょう。そのときに、私は適切な表現はなかなか思い出せなかったです。それは単語や表現の量が少ないのか、学習の方法が間違っただのか、私はそれについて考えています。(A11/20)

・いい点数を取れるかどうか、自信もまあまあだ。いい点数を取ることより、気になるの

は、一学期の授業を受けた自分の能力が進歩したかということを心配している。とりあえず、頑張る。(E1/10)

・特別聴講許可書で履修できると書いてある科目は実際に履修できません。履修したい科目が受けられない可能性もあります。また、うちの学校とはぜんぜん違うジャンルの授業だから、今までの授業でわからない部分もあります。最初の私はストレスがいっぱいで、毎日泣いていました。でも今はもう大丈夫です！友達と相談したからです。(K10/10)

・私だけ由加利ちゃんと一緒に「観光ビジネス論」を受けました。この授業は全部日本人の学生で、やはり怖いです。(L10/10)

・「ダイエット心理学」は留学生向けの授業ではないから、取るかどうかちょっと悩んでいます。でも、私はよく考えると、それは自分にとってもっと独立できるチャンスかもしれません。…いい勉強だと私が今、自分に説得してみます。(H9/30)

ジャーナル・アプローチを始めて、半年ほどたってから、フィードバックにおける授業の内容や方法についての質問を増やした。本来の目的である学習状況の把握に加え、学生に授業についての自分なりの内省を促すこと、さらにテーマを与えることによる記述への動機付けを意図した。

・この前のメールには授業や勉強の話が全然ありませんが、ちゃんとは言えないですけど、本当に勉強していますよ。月曜日の授業はNHKのニュースを聞きながら記事を書いて、そしてクイズを答えます。それは一番難しい授業だと思います。でも、その授業でいろいろな新しい単語が勉強できます。例えば、催涙弾、太陽光発電協会、豚インフルエンザ、放射性物質、宇宙望遠鏡、それは全部最近のニュースから出た単語です。本当に難しいですよ。(I5/30)

・後期の授業は歴史と社会史についての授業が多いです。韓国とインドと中国と日本です。台湾で前期の授業を選んだとき見た「茨城の歴史と風土」も選びました。前期の授業と違う分野の授業を選びたいですが、気付いたら全部歴史の授業です。(F9/20)

・でも映画によって本当にいろいろなことをいっぱい考えられます。自分が考えなかったこともいっぱい出てきます。本当に、教科書以外の勉強になりました。(E6/10)

・今週からいよいよ期末テストウィークです。木曜日に視聴練習という授業で期末テストがあります。視聴練習の授業はドラマを見て、内容を理解して、そして授業の最後でドラマの内容についてクイズを出します。今回はハゲタカというドラマを見ました。その中で経済に関する言葉が多いから、ちょっと大変でした。でも、頑張ります。ファイト！！(H7/10)

・日本語と言語研究は統語論とか言語学についての授業です。とても抽象的な授業なので、わからないことはいっぱいあります。日本語教育の方法も難しいです。前半は日本語初歩の分析で、後半は視聴覚教育とか文字、絵カードの説明です。最後は日本語学上級演習の授業では同じ意味でもどんな場面が使えるかを分析します。日本人にとっては使えるかどうか簡単に判断できるが、留学生はなかなか判断できないところもよく出てきます。(K10/20)

成績についての反省も書かれている。

・Cを取った授業は社会心理学です。ですから、今学期もう一度挑戦します。でも、社会心理学ではなく、進化と人間行動という授業を受けたいと思います。(G9/30)

・私たちの前期の成績はもう出ました。先生はもう見ましたか。私の成績はあまりよくないです。。。二つBを取りました。(I5/30)

以上は、学生自身が授業の内容や方法を把握し確認しなければ、書くことができないものである。「自分の学習を正しく位置づける」「自分の学習を順序だて、計画する」「自分の学習をきちんと評価する」というめた認知ストラテジーを活用していると考えられる。

3-2. 交流を通じた学習

日本語を専攻する学生が、日本留学で最も期待することは、日本人との日本語を使ったコミュニケーションであろう。しかし、その期待が満足にかなえられるケースは思っていたより少ない。

・学校にはたくさんの留学生がいるから、日本人以外の人と交流することができる。日本人は思うより恥ずかしいから、まだいろいろな友達が作っていない。(D10/3)

- ・日本人の学生と一緒に授業を受けているから、ほかの日本人の友だちもできましたが、彼らとの関係は挨拶までです。日本の学生と交流する機会が少ないです。あるとしたら、自分が彼らに話しかけても、答えが短くて、話がなかなかつなげられませんでした。…略… 4ヶ月日本で生活しているのに、日本人のコミュニケーションが理解できません。それは、会話力が低いせいか、いい日本語話者になれなくて、がっかりしています。(A12/20)
- ・日本にきて半年になったけど、私にとって日本人との交流が苦手なのは、変わらなかった。(E4/20)

一方で、留学生同士の交流については頻繁に描かれている。

- ・国際交流フェスタに参加した。いろいろな国の人と話したり、遊んだりした。台湾という国は知っている人がとても少ない。だから、みんなと話すとき、私は一所懸命台湾をアピールした。(D10/30)
- ・意外的に、中国人もやさしい人だと感じられた。前は、ずっと怖かったと思ったのに。(E11/10)
- ・試験が終わった後、皆で餃子パーティーをしました。久しぶりに自分で餃子を作るの、本当に楽しかった。そして、アメリカ人はバナナケーキを作って、食べてもらいました。おいしかったです。(D12/10)
- ・他の国の留学生と友達になることで、いろいろな思い出が出てくれたから、楽しかったです。(C1/30)
- ・先週の日曜日、映画についてのサークル活動に参加しました。12人で日本映画の「おくりびと」を見ました。〇〇先生を含めて、日本人は4人だけです。ほかはウクライナとベトナムと中国の留学生です。(F10/20)

日本人学生との交流は、留学生同士の交流よりも難しいということを一一般化するには、データ不足だが、学生の記述に登場する日本人学生は「留学生との交流を目的としたサークル活動」に参加する学生が多く、個別の交友関係を成立させるのは、かなり難しいようである。しながら、自分自身で考察し、自分なりに納得できる結果を得た例もある。

・この日の晩ご飯は、発表会にきた日本人学生たちと、一緒に中華料理を食べに行きました。(日本人との付き合いは、積極的なやり方をしなきゃいけない。)(D6/30)

・日本人との付き合いということは私にとって、確かに、大変だと思いました。台湾では、クラスメートたちとの付き合いは上手だけと、日本にきて、全然そうではないです。日本人の性格をわかってきて、逆に、どんどん疲れて、面倒なことだと思います。でも、人々が上手なことはそれぞれ違うということも勉強になりました。○さんと私は逆です。クラスメートとの付き合いより、日本人との付き合いのほうが上手だと思います。他の人たちとの人間関係は私にとって、今は勉強中の課題だと思います。(E7/30)

もっとも日本人学生との交流について、自分なりに納得したり成立させたりするには、ある程度時間がかかるようであり、結局は個人差があること、順調に行えた場合、その効果が大きいことが、学生の記述から伺える。

・学校の交流センターで日本人と交流する時、△ちゃんと○さんは話題をまくのが上手で、私いつも皆が話題をまいたら話しますから、これから自分から話題を探せるかどうか、心配しています。何か私の依頼心が強いですよね.....。(I7/10)

・日本に来て一週間のとき、由加利ちゃんが「なんか二人は初めて見たときより日本語が上手になった」と言いました。その言葉を聞いた瞬間、本当に嬉しくて嬉しくてたまりませんでした。実際に上手になったかどうか分からないが、自分が日本語を話す勇気が出そうな感じがします。(L10/10)

・先週、仲良しの日本人と一緒に食事をしたり、ショッピングをしたり、私の家で遊んだりしました。ずっと一緒に遊ぼうと言って、今日ようやくできて、本当に嬉しかったです。私が帰国する前に、また一緒に遊ぶと約束しました。(D7/10)

3-3. 生活を通じた学習

生活の中で、実践の機会を求めること、それに対する自己モニター、自己評価も留学期間中の学習の成功に欠かせないものである。以下は、内省、振り返り、気づきなどを通じた、生活の中での学習の状況が報告された記述である。

・知らない人たちの前で自己紹介をしました。ちゃんとできませんでした。桜がきれいで

した。満開の桜を見て、感動しました。(F4/10)

・自分たちで路線を探して、分からなかった場合も日本人に聞いてみた。日本に来て、学校以外の場所、私もいろいろな生活の勉強ができて、本当にいい経験だった。(E3/10)

・そして、予約するときに、英語でしか予約できない場合もあるし、態度が悪い係員に会ったこともあるから、いろいろ勉強した感じでした。(E9/20)

・ボランティアをしている年寄りは熱心だと思います。たとえば、岐阜のある観光案内所のおばあさんはすごく親切でした。私が迷わないように真剣で案内してくれました。あのおばあさんは台湾が好きですから、ちょっと話しました。(F10/10)

4. 記述の考察

4-1. 自律学習に結びついた記述

交換留学生は、選抜された学生であるという前提があるにしても、派遣された学生は、能動的に学習している様子が見て取れる。ジャーナルが「自分の学習をきちんと評価する」というメタ認知ストラテジーに役立つ方法であると考えてよいかもしれない。さらに、内省によって新たな学習の計画、学習法の選択を行った様子も記述されている。

・だから、これからの毎日は、せめて日本語のニュースを一件見ます。(B10/30)

・日本人の生活会話はちょっと変化がある。たとえば、「わからん」「間違っちゃいないよ。」「なにをしてんの?。」口頭表現の会話、普通は本で書いていないので、番組やドラマを見ることで、こういう話し方を慣れる。日本人の会話内容も理解しやすいと思う。(E11/30)

・最近、たくさんドラマと番組を見ました。見るとき、いつも紙とペンを隣に置いています。わからない言葉を聞いたとき、すぐ書いて、見た後電子辞書で調べます。その仕方です。単語の量が増えると思います。聞き取りも上手になるでしょう。(D3/10)

・今、韓国語を勉強するとき、いつも中国語と日本語の考え方で勉強しています。韓国語の文法は日本語と似ています。発音は中国語のほうが似ています。私に向いている勉強方法でうまく韓国語の勉強が進んでいます。三国の対照言語学、もし本当に研究したら、きっとおもしろいことが見つけられそうですね。(D5/30)

・日本語の能力だけをもってても、未来の仕事を探すのが、無理だと思います。未来の仕事は、日本語とぜんぜん関係がないかもしれないという心理的な準備を持ったほうがいいって、自分に言いました。(E7/30)

また、自律学習における教師の役割として「相談相手、コンサルタントになる」「気持ちに対処する方法を見つけるのを助ける」という役割が挙げられていることは既に述べたが、その役割を意識しなければならない事例も複数あった。

・今日、能力試験の結果を発表しました。残念でした。私は「不合格」でした。…略…たぶん、日本語学科の道は私にとって似合わないことを考えました。日本語を使う仕事が人生の目標としては、正しいかどうか、もうわかりません。(E2/20)

・春休みは暇だけと、能力試験を失敗した悪い気持ちの整理をして、今学期に勉強の目標を考えたい。(E2/28)

学生Eの場合は、一度のフィードバックで、前向きな気持ちを表明してくれたので、教師としての役割は、ある程度は果たせたものと考えられる。

学生Aの場合は、9月末の派遣時から1月末に帰国するまで、異文化適応段階における「移行期(敵意期)」にあったのではないかと思えるほど、いわゆる「日本人論」的な発言が多かった。以下はその一部である。

・その先生は留学生の立場に立たなくて、全く自分のことを考えていました。留学生として、いくら怒っても何も言えません。それがとても悲しいと思います。(A10/20)

・日本に来て、初めて日本社会に入って、本当の日本人の性格が分かりました。やはり日本人は「内」と「外」の考えが強いです。それで、もしかしたら、私は日本に向いてないかなという気がしています。(A12/25)

学生Aには、明らかに「異文化ストレス」が感じられ、それを緩和あるいは解消するフィードバックができたかどうか確認はもてない。ただし、帰国までメールのやりとりが続いたということは、学生の感じたストレスを受け止める役割を、多少なりとも果たしていたのではないかと考える。更に、御堂岡(1997)では、異文化ストレスはマイナス面だけではなく、「知らないことを調べ

たり、できないことを練習したりする意欲につながり、自己を向上させるもととなる」とされている。実際、日本社会や日本文化について言及する際に、学生Aは、長文で論理的で間違いが少ない記述をした。異文化ストレスが自律学習を促したと言ってもよい例かと思われる。

4-2. ジャーナル・アプローチとしての役割の検証

派遣先機関での学習はもちろんであるが、一定期間を過ぎると、日本の文化や風俗についての考察の記述が増えている。上述したが、ジャーナル・アプローチは、異文化理解・異文化学習の領域で成果をあげてきた方法である。ジャーナルを書くことにより、異文化接触を意識化し、理解や交流につながれば、それは一つの成果だと考えられる。

・広島に来て、もう三ヶ月、今週やっと原爆資料館へ参観に行きました。館内の雰囲気はちょっと悲しいですが、もう一度行くつもりです。参観の日は人が多いですから、あまり詳しく参観しませんでした。(I6/30)

・大阪人はなんか台湾人っぽい。なぜかと言うと、今まで会った日本人は慎重な感じがしますが、大阪人は開放的な性格が見られると個人的に思いましたから。あと、もう一つことは、大阪の運転手はもっと台湾人に似てると思います。広島に道で歩いて、車にあったら、人が先に通り、大阪は車が先に通る場合が多いです。(I9/10)

・マスコミと映画とかからの情報から、東京はなんか高度の商業都市と頭にそんなイメージを残りました。そして、初めて東京へ行って、羽田空港で秋葉原行きのバスを乗るときに、窓外にいろいろな工場みたいな建物を見ました。それはきれいではないというか、自分のイメージと違うからびっくりしたと思います。(H9/10)

・今、アパートの隣に住んでいる人はとてもうるさいです。…その事件を通じて、回りの日本人を観察しました。日本人はほかの人に迷惑をかけないというイメージが変わりました。(F6/10)

・最近、日本人と話すとき、よく台湾についての話をしました。本当に一人でも多くの日本人が台湾や屏東に興味を持ってほしいと思います。私、できるだけ、多くの人に台湾のいいところを宣伝したいです。(D7/10)

ジャーナル・アプローチとしての役割が果たせたかどうかについては「学習者が安心して自己開示できるような空間(ジャーナル世界)」が成立したかどうかという観点もある。

・なんか、する事がいっぱい煩わしい感じがします。この前も、そんな感じがあったが、インターネットで母とか友達とかと話したら、また元気になりました。今だったら、話したけど、その煩わしい感じはまだ残っています。どうしたらいいかわかりませんが、…(I7/20)

自分が強く希望した留学生活においても「煩わしい」ことはあるであろうし、そういった感情をある程度開示できる学生のほうが、精神的には安定できると思われる。他の学生との間においても、さまざまな感情が起こり得ることを前提に、前向きに留学生活を送れるようフィードバックを行い、「自己開示」可能な空間作りに配慮したつもりである。

厳密には、フィードバックを通じた信頼関係を確立がなければ、ジャーナル・アプローチとしての役割を果たすことはできない。今回、すべての学生との間で「ジャーナル世界」が成立したかどうかは、更なる検証が必要であろう。

4-3. 自学ノートとしての役割の検証

作文の能力の向上については、別の機会に検証したいと考えるが、ジャーナルが学生の作文能力についても、内省を促し、自律学習に結びついていると受け取れる記述もある。

・特に、動詞の変化が間違いだらけ、だめだよ、こんな私。ずっと、作文の文を書いていて、日記のほうがちょっと苦手だと思う。本当にもっと練習しなければならないね。(E10/30)

実は「自学ノート」の役割を目的から外せば、学生とのやり取りは、学生の母語で行うことも考えられ、特に自律学習における「相談相手、コンサルタントになる」「気持ちに対処する方法を見つけるのを助ける」という教師の役割については、より高い効果が期待できたと考えられる。

しかしながら今回は、日本語で書いたり読んだりすることによって学習や留学生活についての内省を行うこと、すなわち「ジャーナルを書く」行為が自律学習の一環であり、日本語での読み書きを日常の中に位置づけることは、「自学ノート」による学習の習慣づけに共通するもの

であると考えた。

また、自学ノートとしての役割を果たすには、一定以上の記述を求める必要があったが、開始当初は記述量が徐々に少なくなる傾向があった。理由としては、留学生活が一定期間を経て落ち着いたこと、同じ留学先に複数の同級生が在籍し、既に自分以外の学生が同内容の報告をしたと考えたこと、また、実施当初はフィードバックの量や内容が均等になるように心がけ、踏み込んだフィードバックを行わなかったことなども要因だと考えられる。

そこで、徐々に、学生の記述に対し質問をしたり、意見を述べたり、記述内容をリクエストしたりする形で、記述のテーマや内容を指定する「自学ノート」の要素を取り入れたフィードバックに変えた。これにより、記述量も増加し、ジャーナルの提出が不定期になりがちであった学生も、その頻度が一定してきた。さらに同じ出来事を扱った記述でも、自分なりの意見や解釈を述べるようになった。

5. 今後の課題

「自律学習」という観点から今回の取り組みについて考えると、「ジャーナル」が能動的に学習せざるを得ない状況、あるいはそのように報告せざるを得ない心理状態を招いている可能性も否定できない。「自律学習」を促すと肯定的に捉えてよいか、「自律学習」と呼べない「強制」的な状態を招いているのか、個別に継続的に検証する必要があるだろう。

今回の日本語によるジャーナル・アプローチという手法については、学習者側からは特に大きな負担を感じている様子はなかった。しかし、既に帰国した学生から、日本語能力向上への期待が感じられるフィードバックに対し、「プレッシャーを感じた」という意見があった。その後、激励や学習の奨励に関する表現は控えるようにしたところ、学習者からの記述に、学習態度や成績への反省、さらに学習意欲を表明する内容が増えた。「ジャーナル世界」の成立に近いといえるのではないかと考える。

交換留学生とのジャーナル交換を始めて、一年以上が経過したが、この間、留学先での状況が把握できたことによりフィードバックの記述方針も変化し、フィードバックにかかる時間も短縮された。今後は更に記述を検討し、留学中の学生に対する、より効果的、より効率的な自律学習支援を考えていきたい。

また派遣留学生以外の在學生についても、ジャーナルあるいは自学ノートの効果的な導入

を検討し、自律学習支援に結び付けたいと考える。

(いしかわきよひこ 国立屏東商業技術学院)

参考文献

- (1) 青木直子(2001)「第1章 教師の役割」青木直子・尾崎明人・土岐哲編『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社
- (2) 河野理恵(2000)「作文教育としての『ジャーナル・アプローチ』の意義」『一橋大学留学生センター紀要』一橋大学留学生センター
- (3) 倉地暁美(2006)「情意領域を重視した第二言語習得理論とジャーナル・アプローチとの接点」『広島大学日本語教育学科紀要』広島大学教育学部日本語教育学科
- (4) 田尻悟郎(2008)「生徒の心に火をつける！田尻実践のなぞを解明する」2008年度日本語教育学会研究集会第三回会員研修資料
- (5) 御堂岡潔(1997)「第13章個人レベルの異文化接触」石井敏他編『異文化コミュニケーション・ハンドブック』斐閣書店
- (6) レベッカL.オクスフォード(1994)宍戸他訳「言語学習ストラテジー」凡人社